藤田嗣治の舞台美術作品 1951 年スカラ座『蝶々夫人』に関する一考察

佐野 勝也（早稲田大学）

藤田嗣治（レオナール・フジタ 1886-1968）が手掛けた 1951 年ミラノ・スカラ座オペラ公演『蝶々夫人』の舞台美術を取り上げる。スカラ座所蔵資料及び東京国立近代美術館藤田旧蔵書資料などに基づき、オペラという総合芸術のために藤田が創り上げた独自の舞台芸術空間を画家の絵画作品と照合しながら考察する。

『蝶々夫人』はジャコモ・プッチーニ（1858-1924）の 6 作目のオペラだが、1904 年スカラ座の初演が大失敗の酷評を受け、憤慨した作曲家により同劇場での上演を封印されたいわくつきの作品である。スカラ座は、第二次大戦中の 1943 年に空襲に遭い再開不可能といわれたほどに大破したが、ミラノの人々の熱意と努力によって 1946 年奇跡の復活を遂げた。1951 年、初演以来のプッチーニの封印を解いて再演することになった『蝶々夫人』は、新生スカラ座の威信をかけた新制作でもあった。その舞台美術担当としてパリに戻ってきたばかりの藤田に白羽の矢が当たるのである。藤田はヨーロッパにおいて劇場芸術の重要性を認識しており、劇場芸術が美術市場と連動していることも十分に理解していた。ヨーロッパが誇る大歌劇場からの依頼に並々ならぬ決意で取り組んだことは想像に難くない。

これまで、藤田研究において彼が手掛けた舞台美術作品はほとんど顧みられることがなかった。現在舞台美術 9 作品を特定しているが、1920 年代から 1950 年代まで画家としての活動期全般に渡って手掛けていることに加え、能・歌舞伎・新派演劇から前衛モダンバレエ、クラシックバレエ、オペラと幅広いジャンルにまたがる点は注目に値する。ただ資料が散逸しており、藤田の舞台美術に関する俯瞰的な研究は大変困難な状況にあった。

本発表の『蝶々夫人』舞台美術は、他の藤田の舞台美術作品と違って、1951 年初演以来、1971 年までの 6 シーズンで上演された。また、1957 年からウィーン国立オペラ劇場で採用され、こちらは現在も上演され続けている。そのため幸いにも舞台装置及び衣裳デザインの全貌がほぼ分かる形での資料を元に詳細な分析を行なうことによって、藤田の手掛けた『蝶々夫人』が 1904 年初演の舞台美術とも同時代の日本の舞台美術家たちのリアリズム的な作品とも全く発想の違った、1950 年代のヨーロッパの観客が未だに抱いていたジャポニズムへの憧憬をまさに具現化するような心憎い意匠の「フジタの日本」を表象していることが明らかになった。絵画作品と同様に、藤田が内包する西洋と東洋もしくは西洋と日本という対立軸が激しくせめぎ合いながら藤田のなかで融合して藤田独特の着地点に到達しているといえよう。それは藤田独自の劇場芸術空間であり、渾身の芸術作品といえるものである。藤田の舞台美術制作にかける真摯な姿勢を確認できると共に、戦後のヨーロッパで再び画家フジタのブランドを確立するために藤田が創出した新たな一面を提示する。